

CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

Contents

1. 令和元年東日本台風(台風第19号)の
対応から ~気象防災アドバイザーの役割について~
2. 大雨警報について
3. お天気よもやま話
~紅葉



1 令和元年東日本台風（台風第19号）の対応から ~気象防災アドバイザーの役割について~

2019年10月11日、令和元年東日本台風（台風第19号）が上陸して東日本の広い範囲に大きな災害をもたらせた日です。この日は、朝から足立区の災害対策本部に詰めていました。台風第19号が関東に接近して足立区を流れる荒川の上流部に大雨が降る予想で、氾濫の可能性も想定されていたため、刻々と変化する気象状況を伝えるとともに足立区の防災対応を支援するためでした。

その3日前の10月8日には、11日から12日頃に台風第19号が接近して足立区への影響が大きいことがかなりの確度で予測されていることを、足立区の水防本部（現在は災害対策準備本部に相当）に出席して伝えました。それを受けて足立区では、12日と13日の土日の区の行事をほとんど中止する決定を行いました。

10日にも足立区へ出向き、ただならぬ気象状況であることを伝えて、災害対策本部の設置や早めの避難所の開設につなげることができています。

11日は、刻々と変わる気象状況に合わせて足立区では何度も災害対策本部が開催され、当時の避難勧告（現在の避難指示）の発令基準を相当に前倒して発令や避難所開設の拡大などを決定しています。

足立区は、荒川が氾濫した場合には区のほぼ全域が洪水被害にあうことが想定されているために、早め早めの

避難行動が必要であり、それを判断するための支援情報を提供した結果でした。

気象庁が今年1月に「気象防災アドバイザー推進ネットワーク」を立ち上げ、さらに、今年度は久しぶりに気象防災アドバイザー研修を実施しています。とても良いことだと思います。

足立区や他の地域のタイムラインの取り組みを通じて感じることは、精度の高い気象情報があって、かつ、その地域の過去の災害を含めた災害リスクや各自治体の対応力を把握することで、的確な防災気象アドバイスが可能であるということです。

地域に根ざした、地域の実情をきちんと把握した「気象防災アドバイザー」を全国各地に拡充することが災害を防ぐための方策の一つであると確信します。



令和元年東日本台風時の足立区の災害対策本部の様子



2 大雨警報について

大雨警報は、気象庁から発表される防災気象情報の中でも、その名をよく知られたメジャーな情報と言えるでしょう。警報とは、土砂災害が起きたり、家屋が床上まで浸水したり、人的被害が出るような重大な災害が発生するおそれのある時に、市町村単位で警戒を呼びかけて行う予報のことです。対象とする現象や災害によって洪水警報、大雪警報、暴風警報等、7種類ありますが、大雨警報はさらに警戒すべき災害によって3パターンあります。

大雨警報が発表されている時、気象庁のホームページを見ると括弧書きが付されており、大雨警報（土砂災害）、

神奈川県警報・注意報（発表状況）	
2022年09月20日13時13分発表	
神奈川県東部	警報・注意報・警報の切り替え
警報・注意報(概略)	大雨警報(土砂災害、浸水害) 波浪警報 高注意報 強風注意報 洪水注意報
神奈川県西部	警報・注意報・警報の切り替え
警報・注意報(概略)	大雨警報(土砂災害) 高注意報 強風注意報 波浪注意報 洪水注意報

厚木市の警報・注意報（今後の推移）	
2022年09月20日13時13分発表	
厚木市	備考・関連する現象
	浸水注意
大雨(浸水)	土砂災害警戒
大雨(土砂災害)	高注意報
雷	高注意報

気象庁ホームページ表示例

大雨警報（浸水害）と書かれています。がけ崩れや土石流といった土砂災害発生のおそれが高まっている場合には大雨警報（土砂災害）が発表されます。排水設備の処理能力以上の大雨が降り、低い土地等が水浸しになってしまう浸水害発生のおそれが高まっている場合には大雨警報（浸水害）が発表されます。土砂災害と浸水害の両方への警戒を呼びかける場合も含め、大雨警報としては合わせて3パターンあるというわけです。

一方、メディアや自治体等から広く伝えられる情報の中では、括弧抜きの「大雨警報」という表記が多く見受けられます。土砂災害と浸水害のどちらへの警戒が呼び掛けられているかにより、対象者も対応も異なりますので、大雨警報が発表された場合は、気象庁ホームページで、どの災害への警戒の呼びかけなのかを確認するようにしてください。さらに、気象庁のキキクル（危険度分布）という情報で「市町村内のどの地域で、どの災害の危険度が高まっているのか」を確認し、必要に応じて避難の準備や避難行動を始めてください。

気象庁 キキクル（危険度分布）



3 お天気よもやま話 ～紅葉

「秋の夕陽に照る山もみじ、濃いも薄いも数ある中に・・・」最近、あまり耳にしなくなった旧文部省唱歌『紅葉』の一節ですが、これからの季節、赤や黄に色づく秋の紅葉は春の桜とともに日本人に愛され続けています。中緯度に位置する日本では亜寒帯から亜熱帯までの気候帯に様々な樹林帯があって、中でもモミジやカエデ類をはじめ紅葉する落葉樹が広く分布しています。また、南北に連なり、平野から山沿いまで緯度や標高が異なるため、沖縄や一部の島嶼部を除いて少しずつ時期をずらしながら長い期間ほぼ全国で紅葉を楽しむことができます。一口に紅葉と言ってもカエデ類やナナカマド、ドウダンツツジなどは文字通り「紅葉」し、イチョウやカラマツなどは「黄葉」し、多彩な色のコントラストを楽しむことができるのも日本の紅葉の特徴でもあります。さらに、柿もみじなどとも呼ばれるように柿の葉も見事に色づき、晩秋から初冬の美しい風景を演出してくれます。

一般的には日最低気温が10℃前後に下がるようになると紅葉が始まると言われています。北海道では平野部でも9月下旬頃から、東北地方でも10月のはじめ頃には少し標高

の高い所から紅葉が始まります。関東以西の地方でも11月に入ると次第に冷え込むようになり、葉が色づいてきます。ところで、紅葉

は毎年同じように色づくわけではありません。紅葉の美しさは夏から秋にかけての天候に大きく左右されます。美しい紅葉が楽しめる条件は、台風や発達した低気圧によって葉が痛めつけられないことはもちろんですが、気温や日照、雨量といった要素が大きく影響してきます。この時期に日照に恵まれ、適度な雨が降ると紅葉の主役となる赤い色素が大量に生産されます。また、9月から10月にかけての気温の変化も紅葉に影響を与えます。特に、紅葉の始まる直前、冷え込んで昼夜の気温の差が大きくなるのが美しい紅葉の条件とされています。そろそろ台風シーズンも終わりに近づいています。北海道ではすでに紅葉が始まっています。「花はふもとから咲き、紅葉は峰より染む」と言われるように、北海道以外の地方でももう間もなく標高の高い所から紅葉が始まり、秋が次第に深まっていきます。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

